

第33期第6回社会教育委員会議 意見等整理表(案)

資料3

枚方市教育委員会
社会教育部

項目	委員名	内 容	論点(キーワード)	対応方策	備考
意見書の素案に関するご意見	志保田委員	定年とか年齢制限とかということで、職場というものがないわけですね、高齢者に対しては。だけど、元気な人はいっぱいいて、ジムに通ったりマラソンに参加したりしている人はいっぱいいるわけですね。そうした時に、それを作り出して、就業とまではいかない、さっきそちらで言われたようなボランティアにしろ、そういう場の可能性というものを作っていくのが、一つの社会教育ではないかなと思うのですけれども、ただ社会教育だけではどうにもならないような気がするところがあるんですね。例えば働く場を社会教育で急に作れるかという、そうではないので、生産の場、例えば農地を提供するとか、花壇を提供するとかいう例を含めて、 <u>就業したり、業といえなくても就務できるような、そういう支えを市全体としての連絡の中でつくっていただく必要があると。その働きかけをどうされるのか、難しいかなと思ったりするんですね。</u>	高齢者の就労や社会参加の場作りへの行政の関与	高齢者の就労・就務機会の拡大について、市全体として取り組むよう社会教育の観点からも働きかけるべきことを課題解決に向けた取り組み部分に加筆します。	
	西田委員	確かにきららで色々な高齢者の講座に携わっていたのですけれども、1,000人近い応募者で、540人くらい毎年講座に参加していただいて、割と画期的に学ばれているんですね。そういった人たちの基盤というのは、やはり年金生活で安定している人が多いですね。ただその中でよく遭遇するのは、ご夫婦で1人亡くなって閉じこもっていたけれども、こういう機会であることで、自分は生き甲斐を感じるようになったと。そういう人たちが、結構人数的にいますね。以前は70歳以上の方が多かったのですけれども、だんだん年齢層が若くなって、今は62歳から65歳くらいの人たちが、私のいるとき60%近く占めていましたね。だからまだまだ活力があるんですね。 何かしたい、でもどこで何をしたらいいかわからない人たちも多いですね。施設のボランティアとか、あるいは山田池公園であれば、あそこの管理、草木に水をやったりとか、木の剪定とか、そういうのでボランティア活動をするように、向こうで講座を開いてもらっているんです。ですから、そこで講座が終了した後、ボランティア活動をする人も数名出てきています。そういう形で、できるだけ地域で貢献できるようにと思って、いろいろ支えはしているけれども、彼らの言うのは、 <u>もっと市として支援していただきたい、これを市に言って頂きたいということ、ずっと言われてきました。もちろん、わずかな年金で生活しておられる人たちも来ておられますので、例えば会場を借りて自分たちで何かしたいといったときに、あるいは学習を続けていきたいといったときに、会場費が一般と一緒にですね、高齢者。そういった面で何とか働きかけてもらえませんかという意見は聞いております。</u>	地域活動・社会参加を支える経済的豊かさ 地域活動・社会参加意欲と地域活動団体等とのマッチング ボランティアへの支援	課題解決に向けた取り組み部分に、地域活動・社会参加と経済的豊かさの関係性に触れるとともに、ボランティアへの支援、地域活動・社会参加意欲のある市民への地域活動団体等の情報提供の必要性について加筆します。	
	松浦委員	例えば枚方市自体に、平成21年度をピークとして人口の減少に向かっていくという推定で書いてありますが、大阪近郊でも和泉市などは確かに人口が増えているのではないかなと思うんですね。それには、恐らく大阪市周辺部分との高速道路網の問題であるとか、さまざまなことがあるので、一概には言えないのかもしれませんが、他都市の、特に人口が増えている、そういうことが経済的な豊かさに結びついていくと想定されるような都市の実情、なぜそうなのかなということ、例えば枚方市の実情とどう違うのか。そういうことを冷静に分析したものはあるのでしょうか。その辺が、こういう問題を解決していく時の何か基礎的なことになるのではないかなという感じに見えました。 <u>繰り返になってしまうかもしれませんが、枚方市の判断材料になるようないい事例があれば、当然それは考えなくてはいけないと思うのですが、大阪府の中でも、実際和泉市など増えているという実情がありますので、そういう近いところの例を十分分析されたいかなかなと思いました。</u>	人口増加都市との現状比較と分析の必要性	和泉市をはじめ、先進事例の研究を行うよう課題解決に向けた取り組み部分に加筆します。	
	志保田委員	実際の問題は大分拳がってきて、割と網羅されているかなとは思っているのですが、それぞれが、例えば社会教育として作用していくためには、何かまだ核のようなものというか、地盤のようなものが形成されていないような気がするんですね。それは、市の問題とか社会行政とかの問題ではなくて、問題自身がバラバラになるようなところがあると思うんです。例えば、民生的な問題と知識、教育的というのが両方あって、それを融合しないと成り立っていかないような、例えば高齢者1人を対象にしても両面を持っていると。生活の安全ということと、いわば教育的、知識的な発展というものが両方あるんですが、 <u>本人は両方持っているのですけれども、それがちょっと部局的に分かれているような状況が、どの市であろうと町であろうと起こっているということですね。それをうまく市が作り上げていくということが図れたらいいのではないかなと思うのです。例えば高齢者の場合、徘徊ということが問題になっていて、徘徊の札をつけるとか、徘徊110番であるとか、そういったことが言われている市がある一方、例えば神戸市なんかの場合ですと、社会教育施設、特に公民館の建物の劣化ということが起こってきて、それを潰して合同的なものにしようという動きがあったりしているんですね。こういったことは、それぞれの市のやり方ですけれども、一見合理化のように見えてしまう面があるんですね。地域性の弱体化という面があるかもしれないということを、ちょっと検討されたいと思うんですけれども、そういう施設の老朽化というようなこと、今度新しいものを形成していくという中で、地域性が薄れないようにするとか、そういった時間軸も必要ではないかなと思います。少し俯瞰的なことを申し上げましたが、高齢者を対象といたしました場合に、<u>民生的なことと教育的なことが掌握されているところと、少しばらついているところがあるのを、本人としては一体であるということ、それからまた、社会教育行政というものが再編成の時期に来ていると思うのですが、それが地域性というものを弱めるようなにならないこと、そういったことの2点をちょっと申し上げたかったかなと思うわけでありませぬ。</u></u>	民生的側面と教育的側面を一体的に捉えた取り組みの必要性	他部局との連携も含めた枚方市全体としての取り組みの必要性、社会教育行政の再編成の必要性について、課題解決に向けた取り組み部分に加筆します。	

項目	委員名	内 容	論点(キーワード)	対応方策	備考
意見書の素案に関するご意見	松浦委員	資料1の内容、まとめ方、これまでの経緯が非常にわかりやすく簡潔にまとめられていますので、かえってこんな風に思うのですが、活力あるまちづくりというものの考え方で、何をもちて活力があるとするのかで、特に問題点の中で指摘されている1番目ですが、低成長時代を迎えて、経済的な豊かさがだんだんと落ちていくという風な前提がまずあって、つまり経済的な豊かさがなければ、恐らく全ての事業は上手くまわっていかないはずですので、この問題点における1番目が、次のコミュニティの衰退とか、あるいは社会の中のつながりの希薄さと直結していると思うんですね。それが逆にはっきり見えてしまう書き方になっているので、経済的な豊かさが衰退していくというのは、ある種日本全国の問題でもあるかと思いますが、そう簡単に云々言える問題ではなくて、しかも例えば、枚方市に限ってみても、教育委員会だけで解決できる問題でもないと思うんですね。だから、そのことが、先ほど志保田委員が発言されたことに関係しているかと思うんですけども、つまり縦割りの、例えば教育委員会だけでやる、当然教育委員会だけでやれることは十分検討しなければいけませんけれども、その枠を超えた別の部署との連携を図って、枚方市全体として、経済的に上向きになっていくような何かを作らなければ、他の問題がうまく解決していかないのではないかと。どんなに高齢者の力を活用した、活性化まちづくりを考えても、前提となるところがうまくいかないと限界があるのではないかと感じるに読めてしまうんですね。その辺のところは逆にはっきりしたから良かったのかも知れませんが、この辺はどうなんでしょうか。	経済の活性化のための、部局を超えた仕組み作り	地域における社会教育活動の基盤ともなる経済の活性化に向けた他部局との連携の仕組み作りの必要性について、課題解決に向けた取り組み部分に加筆します。	
	森山委員	ちょっと根本的なことになるんですけども、高齢化社会の問題ということですけども、対象を子どもから高齢者・障害者や外国人ということで、全ての人を対象に考えようということ、すごくいいなと思うんですけども、実際問題の地域社会を支える地域コミュニティの衰退とか、社会のつながりの希薄化というのは、生産人口の中でまだ子育てをしていない人らであるとか、子育てが終わったという人らが、地域コミュニティからいったん離れるじゃないですか。子どものころは地域で遊んでいたけれども、大きくなって地域コミュニティから離れる、また結婚して子どもができれば戻ってくるみたいな波があるじゃないですか。そういうところでいくと、問題点であるとかいうのは、その辺の人らをどうコミュニティに引き連れてくるかということが抜けているのではないかと気がするんですね。正直、高齢者の方というのは今大変元気で、皆さん地域活動とかすごく、逆にされているのではないかと気はしているので、そのあたりの視点がちょっと抜けているかなという気がしました。	地域コミュニティからいったん離れてしまった層へのアプローチ	課題の中に、コミュニティからいったん離れる層へのアプローチの必要性について加筆します。	
	志保田委員	たまたま私、和泉市にある大学に勤めているのですが、市役所ではないですけども、結局あそこはニュータウンを作って、住居・商業・学校という3つの拠点、枠を作ったんですけども、それで人口がどんどん増えてきた。そして市役所が統括する形で、和泉シティプラザに和泉中央という駅を持ってきて、新しい街づくりをやってきた。住民・住居主体のようところを作ったんですね。だんだん人口も増えていって、それは確かなんですけども、その時に、私は桃山学院という大学に属しているんですが、その卒業生もいますけれども、そこが発展して行くというのは、市の大きな投機だったと思うんですね。ここでも関西外国語大学の建物のあとを引き継いでやっておられて、意義があると思うのですが、私をもっと意義を感じているのは、関西大学が高槻市に社会安全学部というのをやって、その中に高橋・織田・町田を育てたスケートリンクとか、公共図書館を何と大学の中に作っているんですね。そういった公共団体と大学、外の施設とのコラボによって生産性を高めている。ここも多少、関西外国語大学さんとの関係であると思うんですけども、ちょっと幅の広い言い方をさせていただくと、単科大学ですから、もっと外国語系を強くしてもいいと思うんですけども、関西大学なんかだったら総合系ですから、いろんなアプローチがあると思う。だからこの辺でしたら、摂南大学さんとか、もっとアプローチをして、大阪工業大学さんもそうですけども、もう少し展開の仕様があらうらうと。 だからそういう基本の市の成長を図るということを考えれば好転するということですね。中におりまして、和泉市の成長というものは、それほど恩恵を感じていないんですけども、自然の勢いで成長しているということですね。筋がつかますと発展していく可能性があると思いました。	大学等の地域資源との連携も踏まえたまちづくり視点の必要性	地域資源を生かした、まちづくりともリンクさせた社会教育推進の必要性について、課題解決に向けた取り組み部分に加筆します。	
	嶋田委員	私もやはり、結論は高齢の方々が学びに行き甲斐を作ったり、またつながりを持ったり、その先に一体、では高齢者の方々は何を求めていくのかと。そこで勉強したからといって、勉強した先に何かがあるんだということが大切ではないかなと思います。一人ひとり、友達を作りに来るだけの人もいれば、まだまだ元気なのでスキルを学んで働きたいと思う人もいます。で、産学官民が一体となった、縦割りだけではなく、横のつながりを持った形を作っていくかなと思いますし、同じようなモデルケース、成功しているところとか、欧米とか、あっちの方になれば、もっと社会的に発展しているところもあると思いますので、色々な事例を、我々も勉強不足、私も勉強不足ですけども、役所の方で勉強していただいて提出していただければ、我々40万人都市の枚方市というところで、他市に先駆けたモデルケースを作ることではできないか、可能性のある市になるのではないかと考えていますので、いろいろとまた私も勉強したいと思いますので、いろいろと教えていただければと思います。	産学官民連携による、地域住民のつながりを強化するモデルケースの学習の必要性	産学官民連携による、地域住民のつながりを強化するモデルケースについて、行政が学ぶことで、本市における地域の人々のつながりを生み出すことの必要性について課題解決に向けた取り組み部分に加筆します。	